

---

# うずまきナルト物語

御庭

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

うずまきナルト物語

### 【Nコード】

N1694BA

### 【作者名】

御庭

### 【あらすじ】

この世に”生”を受けた時

一人の子の中に”妖狐”が封印された。

子の親は”波風””うずまき”と名乗る者…しかし…”妖狐”を封印した際に…命を落とした。

子の運命は…”妖狐”を封印されたと同時に”闇”とかす。

後に子は”うずまき”と名乗る。

子…”うずまき ナルト”

後に子は…里の大きな力になる。

## 始まり

オレの名前は”うずまき ナルト”

今、三代目火影のじーちゃんにお願いがあつて…じーちゃんの処に  
来ている。

ナルト「じーちゃん！オレも忍者養成学校アカデミーに入りたいってば！」

三代目「ナルト…お主はまだ3つじゃ…早すぎる」

ナルト「えーっ！オレってば、じーちゃんみたいな強くて優しい忍  
びになりたいんだってばよ！」

三代目「ナルト…ダメじゃ…」

少し嬉しそうにするじーちゃんだが、まだ折れない。

ナルト「じーちゃん…お・ね・が・い・だってばよ！」

下から目線でじーちゃんを見上げる。

三代目「…う…だ、ダメじゃ！…しかし…なんじゃ…条件を出して  
やるから…その条件を守れたら…許可しよう」

じーちゃんは眼をキョロキョロさせながら言った。

ナルト「ホントー！んじゃあ！条件を聞かせてくれってば！オレっ  
てば！守るから！」

三代目「そうか…では…」

オレはじーちゃんの出した条件を聞き、その後、一人暮らしをする事  
になった。

じーちゃんが決めたアパートに行くとき家の中には何も無い状態の部  
屋に一枚の封筒が置いてあった。

封筒を開けると”うずまき ナルト”と書いてある通帳と手紙が入  
っていた。

手紙の内容は…

” うずまき ナルトへ

この通帳はお主の両親がお主の為に残したお金が入っている…何に使うかはお主が決める事じゃ…ただ、考えて使えよ

三代目火影”

つと書かれていた。

手紙を閉じ、通帳を開くと

” 50・000・000 ” 両

と書かれていた。

ナルト「 50・000・000両 ” ってば…多いってばよ?…計画的にしないとな…まあ、まず…冷蔵庫、洗濯機、鍋、フライパン…野菜と魚…肉は…良いや…後は…歯磨き粉、歯ブラシ…後専用のコップで良いかな?…服は…動きやすい服と寝巻き、冠婚葬祭とか言う専用の服と…まあ10着以内で考えよう…後は…ノートや鉛筆、消しゴム…巻物…筆で良いかな」

そう言いながら商店街で買い物をする為に、靴を履いた。

ナルト「よし、行ってくるってば!」

商店街

商店街を歩いていると、里の何人かの大人たちがオレを睨みながら何か言っていた。

大人「化け物」がのん気に歩いてんじゃねえよ」

大人「おい！小さい声で言えよ！聞こえちまうぞ！」

オレはその大人たちの側に行き見上げる。

そして小さい声で…

ナルト「ねえ？おじさん達？オレの中にいる」九尾の尾獣”に会いたいの？」

大人「っ！？な、何故その事を知っている…禁句な筈！」

ナルト「何故？そんなモン最初から知ってるってばよ？大人たちのオレに対する眼を見ればな！んで？会わしてあげようか？」九尾の尾獣”に」

大人「な、何言ってるんだ！」

ナルト「安心しろってばよ…オレってば」九尾の尾獣”のチャクラコントロールなんかもう出来るからな！…オレがキレたらどうなるか…分かってるよな？」

オレは大人たちを殺気混じりに睨みあげた。

大人「す、すまなかった！許してくれ！」

大人たちは尻尾を振りながらその場を逃げた。

九尾【ナルトよ…聞こえるか？】

ナルト（ああ、聞こえるってばよ…なんか用か？九尾）

九尾【あやつらが行った方角は…三代目の屋敷だぞ？良いのか？】

ナルト（ん？良いんじゃない？…それより…九尾？巻物って何処に売っているか分かるか？）

九尾【…巻物？何に使うんだ？】

ナルト（まあ…シクウカンニンジュツ買いい物した物を時空間忍術で入れようかなあって思ってる…流石に持ちきれないからな）

九尾【多分…彼処にあるんじゃないか？】

オレは九尾が教えてくれた場所に行くと色々な武器が並べられた店があった。

店主「ん？なんだ？ナルトじゃないか？どうした？」

ナルト「巻物あったら買いたいんだけど…おっちゃん…ある？」

店主「巻物？あるぞ！…でも何に使うんだ？」

ナルト「んと、ノートに使えないかなって…墨入りだと嬉しいんだけど」

店主「墨入り巻物か…後1つで終わりだが？」

ナルト「じゃあ、墨入り巻物1つと普通の巻物4つ…買う」

店主「あんがとな！ナルト！」

そうして巻物を買い、ついでに筆もなつてその場を離れた。

ナルト（さて、次は…家具屋で買い物するか）

九尾【ナルト？時空間忍術ジクウカンニンジュツはいつやるのだ？】

ナルト（ん？あ…後でやるつもり）

## 家具屋

ナルト「こんにちは？」

店主「ん？ナルトか？なんか用か？」

ナルト「オレってば！一人暮らしする事になったんだ！でさ、家具買いに来たんだけど…今大丈夫ってばか？」

店主「ああ、大丈夫だぞ！…しかしナルト…お前まだ3つじゃないか？」

ナルト「そうなんだけど…オレってば…里の大人たちに憎まれてるみたいだからさ…三代目のじーちゃんに迷惑かけられないって思っ

て…じーちゃんに頼んだんだってば！」

店主「…ナルト…よしっ！今日は特別サービス！無料でお前の新しい部屋に運んでやる！」

ナルト「え！悪いってばよ！おっちゃんにも迷惑かけたくないってば！」

店主「何言ってんだよ！ナルト！お前に家具を持たせる訳にはいかないからな！」

ナルト「だって…おっちゃん…店…」

店主「小さい事は気にすんな！俺はもう決めたからな！」

ナルト「じ、じゃあお言葉に甘えさせて貰うってばよ！おっちゃん！ありがとうってば！」

店主「で？何が欲しい？」

ナルト「んと…ソファと机と本棚…ソファはベットがわりになりそうなヤツが良いな…」

店主「んじゃ！これなんかどうだ？お前が成長したらベット買わんといけなくなるが…当分はそんな事気にする事が無いと思うぞ？」

ナルト「ちよつと寝てみて良いってば？」

店主「ああ！良いぞ！」

おっちゃんの言葉に頷き横になってみると体を伸ばしても余裕があった…何より寝心地も良かった。

ナルト「じゃあ、これにするってばよ！色はこの色も気に入ったでば！」

店主「よっしゃ！これを荷台に積む…他はどれが良い？」

その後机と本棚を買い、一時おっちゃんと家に戻った。

帰り際、やっぱりお金を払わないとなあと思い、内緒でおっちゃんのポケットにお金を入れた。

その後、時間をあけて再び商店街に行くと家具屋のおっちゃんがオレを探していた。

気配を消しながら八百屋と魚屋、電器屋に行き、買い物を済ませた。



九尾【ナルト】

ナルト（どうしたんだってば？）

九尾【服は良いのか？】

ナルト（…忘れてたっばね！…明日買いに出るか）

因みに電器屋のおっちゃんがオレの家まで電器家具を運んでくれた…しかも又無料で…まあ、内緒でおっちゃんのポケットにお金を入れました。

呼び出すと…。

一人暮らしをして1週間が経った時、オレは三代目のじーちゃんに呼ばれた。

### 三代目火影の屋敷

三代目「…ナルトよ、何故呼ばれたか…心当たりはあるかのう？」

ナルト「九尾の妖狐”を何故知っているか？とか」

三代目「そうじゃ！何故知っている？誰に聞いた？」

ナルト「…こいつに聞いた…口寄せ・九弧<sup>キュウコ</sup>！」

三代目「っ！？」

九弧【ナルト…何か用か？】

三代目「お前は”九尾の妖狐”？」

九弧「ん？誰だ？貴様は？…俺様を妖狐と一緒にすんじゃねえ！俺は九弧だ！」

ナルト「じーちゃんが”九尾の妖狐”と間違えるのも無理が無いな…何せ九弧は”九尾の妖狐”と瓜二つだからな…オレの父<sup>インフウイン</sup>さんと母<sup>ケイヤク</sup>さんの事も九弧に聞いた…それに九尾については今は陰封印<sup>フウイン</sup>と契約封印でチャクラをコントロールしているかな…多分大丈夫」

三代目「封印術はどうやって覚えた？」

九弧【俺様が教えた…俺様はうずまき一族と古くから契約しているからな…封印術も扱えるぞ】

三代目「そうなのか…では、ナルト…お主は本当に”九尾の妖狐”と和解しておるのか？」

ナルト「ああ…している」

三代目「そうか…それだけ分かれば良い…時間を取らせたな」  
ナルト「別に良いってばよ！」

九弧を消し、オレは三代目の屋敷から立ち去った。

## 帰り道

九尾【ナルトよ…聞こえるか？】

ナルト（ああ…どうした？九尾）

九尾【暗部（アンサッセンジュツトクシユブタイ暗殺戦術特殊部隊）の奴がつけているが…どうする？】

ナルト（…さて？どうしようかな？…無視した方が楽かな）

九尾【分かった】

## アパート

部屋に入り、ソファに寝転んだ。

ナルト「…あ！服…買いに行かなきゃ！」

思い出したように又、外に出る。

## 商店街

服屋に行き、動きやすい服と寝巻き、冠婚葬祭とか言う専用の服と…まあ10着程買った。

服屋を出て歩いていると…花屋が目に入った。

ナルト「花…買お！」

花屋「花・やまなか」

花屋に入り、色とりどりの花を見て回る…フツとある植物に目が留まった。

ナルト「ねえ…おっちゃん？あね植物何？」

店主「ん？アレは…」エバーフレッシュ”は”ネムの木”とも言われる…その由来は夜になると葉っぱがパタリと閉じて眠ってしまうから…まあ…本当は葉っぱからの水分の蒸散を少なくする為だとか言われるかな…成長期は春～夏にかけて、新芽がグングン出てくるよ。新芽は赤茶色で段々ときれいなグリーンに変身していくな！後…鉢の土の表面には飾り石を敷いたりしてインテリアにも最適だよ！…日陰にとっても強く、育てやすい観葉植物だから…しかも冬に落葉しないよ！」

店主は早口でオレに話し始めた。

話が終わった後、オレは”エバーフレッシュ”を購入した。

店主「ありがとな！坊主！」

アパート

部屋に戻り”エバーフレッシュ”を日陰に置く、買ってきた服を出し、値札<sup>タグ</sup>を外して壁にかけて置く。

ナルト（…明日は、<sup>タジユウカゲブンシン</sup>多重影分身を放って修業するってば）

## 二人の兄弟

アパート

朝早く動きやすい服を着て、修業の準備をする。

ナルト（…弁当作ろう）

炊事場に行き、冷蔵庫から食材を取り出す。

ナルト「…取り敢えず朝ご飯と一緒にすれば早いかな…卵は一日1個にする予定だから使わなくて良いや」

ご飯を炊き おにぎりを作る

魚の切り身 塩焼きにする

野菜を切る 塩茹でにする

弁当箱に料理を詰めていく。

何故か3つ（理由は後に分かります）

九尾【ナルト…屋根裏に気配があるぞ？】

ナルト（ああ、分かってる…修業を悟られないようにしなきゃな）

九尾【しかし…三代目の事だ…遠眼鏡の術で分かってしまうぞ？】

ナルト（…だよな…さて、どうするかな…狐狸心中の術をかけとかな）

演習場

演習場に行き、コリシンチュウ狐狸心中の術ジュツをかけた後、オレは多重影分身タジユウカゲブンシンをし、

修業を行つた。

ナルト（…口寄せ・九弧<sup>キュウコ</sup>！）

九弧「なんだ？ナルト！」

ナルト（頼みがある…此れから”うちは一族”に行き…サスケとイタチを連れてきてくれ…痕跡は残さないでくれよ？）

九弧「ああ…分かった」

九弧が行つたのを確認をする。

九尾「ナルト…”うちは”には…」

ナルト（ああ…分かつてる）

数分後

イタチ「君が僕たちを呼んだのか？」

演習場にイタチとサスケがやって来た。

ナルト「ああ、実は…一緒に修業がしたかったんで…嫌なら帰ってもらつても…構いませんよ？」

オレの言葉に少し考えた素振りを見せるイタチ。

イタチ「…サスケも誘つた理由は？」

ナルト「サスケはイタチさんと修業がしたいと感じている…オレはイタチさんとサスケとも修業したいからな…一石二鳥の考えをしただけだ…」

イタチ「そうか…分かった…そういえば…君は？」

ナルト「ん？ああ、まだ名乗っていなかったな？…オレはうずまきナルト…まあ…里では”化け物”扱いされている…まあ”九尾の妖狐”憑きだ」

イタチ「君が？…でも、禁句と言われている筈…」

ナルト「ああ、三代目のじーちゃんにも同じ事を言われた…まあいずれは話します」

イタチ「分かった」

ナルト「サスケ！宜しくつてばよ！」

サスケ「宜しく」

挨拶を交わし、オレは二人に勝負をかけた。

ナルト「（影）分身の術！」

オレは分身体を5体だし、4人をイタチに、1体と本体をサスケにわけた。

## サスケと修業

イタチとサスケの距離をあけ、話しかける。

ナルト「サスケ、お前にオレが知っている”ある術”を教える……”  
陰封印・解”<sup>インフライン</sup>っていう封印術だ<sup>カイ</sup>」

サスケ「？なんで解なんだ？」

ナルト「いずれ分かる…何故オレがお前にそれを教えたのか…な」  
サスケ「分かった…他は？」

ナルト「んー、そうだな？…影分身の術<sup>カゲブンシン</sup>を覚えておく！」

サスケ「影分身？」

ナルト「ああ、これは禁術とされている術だ」

サスケ「禁術…何故お前が出来る？」

ナルト「…それは禁則事項<sup>キンソクジコウ</sup>で言えない」

サスケは納得していないようだった。

## イタチと修業

イタチとサスケの距離をとった後、分身体がイタチに話し掛けた。

ナルト「イタチさん…貴方に”ある術”をかけさせてもらう」

イタチ「ある術？なんだい？」

ナルト「その前に…」天照”は使えますか？」

イタチ「っ！？…ナルト君、君は一体何者なんだい？」

ナルト「…使えるかって聞いているんですが？」

イタチ「…まだ万華鏡写輪眼ではないので使えないよ」

ナルト「そうですか…ではまだかけないでいます」

イタチ「何をだい？」

ナルト「今は内緒です」

その後、修業を終えた。

お昼は3人でオレが作った弁当を食べた。



日向の姫と…。

イタチとサスケと修業した翌日、偶然、日向一族の跡目のヒナタに会った。

ナルト「…日向ヒナタさん？」

ヒナタ「え？…誰？」

ナルト「ああ、オレはうずまきナルトだ…宜しくつてばよ」

ヒナタ「よ、宜しくお願いします…あの…何故私の名前を？」

首を傾げながらオレに言う。

ナルト「前に三代目のじーちゃんから聞いたからかな…あのさ！オレはこれから修業する予定なんだ…嫌じゃなかったら一緒にどう？」

ヒナタ「え？修業？…良いの？」

ナルト「うん！良いよ…もしかして予定ある？」

ヒナタ「予定はない！宜しくお願いします」

場所を移動して、オレはサスケ同様…ヒナタに影分身と神楽心眼を教えた。

ナルト「日向一族って体術が得意なんだよな？」

ヒナタ「う、うん…柔拳ジュウケンを使うの」

ナルト「柔拳ジュウケン…ヒナタは…強くなりたいか？」

ヒナタ「うん、になりたい…父上に認めてもらいたい」

ナルト「…じゃあ、教える」

ヒナタ「え？」

ヒナタとの修業の際、オレは…柔拳法・八卦三十二掌ジュウケンホウ ハツケサンジュウニシヨウと柔拳法・八卦六十四掌ジュウケンホウ ハツケロクジュウシヨウを教えた。

その後、ヒナタと修業を終え、ヒナタを日向の屋敷に送り帰宅した。

アパート

ナルト「…」

オレは瞑想をしながら神楽心眼カゲラシンガンを使っていた。

ナルト（…はあ…暗部の人数が増えてきたな…三代目に”嘘”の手紙でも送るか）

瞑想を止めて三代目に手紙を書いた。

ナルト（天送テンソウの術）

手紙を三代目に送った。

手紙の内容

”三代目のじーちゃんへ

暗部の見張り役の数が増えてきたので、じーちゃんに3つの約束をしようと思います。

3つの約束事

1つ、”九尾の妖狐”の力を振るわない

2つ、もし使う場合は里の為に使う

3つ、里を裏切らない

以上

上記の事を約束します。

不満があれば暗部の人に呼び出しを頼んで下さい

うずまき ナルト

追申、遠眼鏡トオメガネの術でわざわざ監視しなくても良いですよ”

## 日向の父

手紙を送ってから、暗部の数は少し減った。

ナルト（…減ったけどまだ15人か…）

オレは神楽心眼カゲラシンガンで周りのチャクラをみていた。

九尾【ナルト、どうするのじゃ？】

ナルト（んー？どうしようかなあ…じーちゃんに人数も伝えてみる？）

九尾【効果あるとは思えんが？】

ナルト（だよな！…あー！もう！無視無視！…気にしてたら…寿命縮みそう！）

それから毎日、オレはサスケとヒナタと修業をした。

途中まではイタチも修業していたが…暗部に配属されて行った。

監視はされていません！

因みにサスケとヒナタと3人で修業する際、サスケは何故日向が？と聞いてきたから…嫌なら帰ってもらっても…っと言うと慌てていた。

呼び出し？

ある日、朝早く日向の人が家に来た。

ナルト「…どうぞ」

部屋に案内する。

日向「朝早くにすまないね？…私は日向ヒアシ…ヒナタの父親だ」  
ナルト「ヒナタさんの？」

ヒアシ「実は…ヒナタの事を聞きにきた」  
ナルト「ヒナタさんの事？…何ですか？」  
オレはヒアシさんの目を見る。

ヒアシ「ヒナタは…私の事を何か言っていたか？」

ナルト「ヒナタさんは…」強くなつて父上に認めてもらいたい”と言っていましたよ」

ヒアシ「…認めてもらう…か」

ナルト「はい、オレは産まれた時から両親の事は知りませんので…ヒナタさんの親に認めてもらうっていう意味が良く分かりませんが…前々から考えている事と似ているのかな？と感じました」

ヒアシ「何と似ているんだい？」

ナルト「ヒアシさんは”九尾の妖狐”がオレの中に封印されている事は知っていますか？」

ヒアシ「っ！？」

ナルト「その様子は知っておられるようですね？…オレは”九尾の妖狐”が封印されている為か…里の大人たちに憎まれています…オレはオレだと…分かつて欲しい…里の為になりたいと思っています」  
ヒアシ「君は…里の人を恨んでいるのか？」

ナルト「オレに”九尾の妖狐”を封印する事によって里が平和ならそれで良いと思います。…それに封印したのは…オレの尊敬する四代目ですから…」

ヒアシさんはオレをジッと見ていた。

ヒアシ「君は…夢はあるか？」

ナルト「夢？…大切なモノの為に命をかけて守りたい…そして、影で見守って生きたいです」

ヒアシ「そうか…き…ナルト君、ヒナタの事を宜しく頼む…」

ナルト「なんかソレおかしいですよ？…オレは勝手にですが、ヒナタさんと友達だと思っています…仲間としてヒナタさんと修業をし

ていきます」

ヒアシ「有難う…朝早くからすまなかつたね」

ナルト「いえ、いつでもきて下さい？歓迎します」

ヒアシ「ああ、又来る事にするよ」

そう言ってヒアシさんは姿を消した。

日向の屋敷に…。

ヒアシさんが家に訪ねてきてから2ヶ月後、事件は起きた。

日向嫡子誘拐事件！？

ヒナタの誕生日にオレは偶然遊びに行った。

ヒアシ「やあ、ナルト君…娘の誕生日にようこそ」

ヒナタ「な、ナルト君…いらっしやい」

ナルト「ヒナタさん！誕生日おめでとうだってばよ！…コレ！プレゼント！」

オレはヒナタに長細い箱を渡した。

ヒナタ「あ、有難うございます！…開けてもいい？」

ナルト「ああ！良いよ！…どう？」

ヒナタは箱を開けると「12月の誕生日石・ラピスラズリ」のストーンが<sup>カンザシ</sup>釵が入っていた。

ヒナタ「綺麗…有難う…ナルト君」

ヒアシ「ナルト君…有難う…ヒナタ、大切にな」

ヒナタ「はい、父上」

その後、ヒアシさんの弟・ヒザシさんと1つ上のネジさんにあった。オレはその日、ヒアシさんの提案で日向の屋敷に泊まる事になった。

夜中にフツと目が覚め、<sup>カケラシンガン</sup>神楽心眼で周囲を確認すると屋敷に入ってくるモノの気配を感じた。

オレはヒアシさんの部屋に行き、ヒアシさんに”白眼”で見てもらうと、ヒナタの部屋に侵入者を発見した。

直ぐさまヒナタの部屋に行き、侵入者を捕獲し、事件は未遂に終わった。

翌日、アパートに帰る際、ヒアシさんにお礼を言われた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1694ba/>

---

うずまきナルト物語

2012年1月8日21時47分発行